

# 移民社会ドイツにおける インターセクショナルな議論の展開

—「クィア」に着目して—

伊 藤 亜 希 子\*

## はじめに

マイノリティをめぐる差別に関する議論において、「インターセクショナルリティ」というタームを見聞きすることが近年増えている。日本においては、#MeToo 運動やBLMへの注目を機にインターセクショナルリティについても注目が高まったと言えるだろう。アメリカのブラック・フェミニズムの流れのなかで提唱されたインターセクショナルリティは、Crenshawが1980年代末に提唱したもので、差別の複層性や交差性を示す概念である。アメリカにおいては、批判的人種理論の影響も受け、伝統的に「人種」「階級」「ジェンダー」の3つのカテゴリーを用いて、インターセクショナルリティを論じることが多い。他方、ドイツにおいては、インターセクショナルリティは分析視点として受容されており（伊藤 2021、Walgenbach 2012）、レイシズムとセクシズムの相違と共通性に関する分析やカテゴリーによる二元論の問題、さらにはそこに潜む価値・規範の問題が問われる。Bräu & Schlickum (Hrsg.) (2015) は、能力、移民、ジェンダー、障害、社会的出自というカテゴリーに注目し、それらのカテゴリーが学校や授業でいかに（再）生産されるのか考察している。そのなかで Bräu

---

\* 福岡大学人文学部教授

(2015) は、「その人を表す一つのメルクマールを教育達成度や特定の特徴及び態度の要因として捉えることによって、その他の特徴やメルクマールを看過してしまう」(S. 26) と指摘する。また、Riegel (2017) は、「社会学や教育学の家族をめぐる支配的なディスコースにおいて、さまざまな権力関係の交差とそれと結びつく重なり、複層的な属性や差別がほとんど考慮されていない」(S. 78) と批判している。ドイツにおいてインターセクショナリティが重視される背景には、これらの先行研究が指摘する問題が関係している。換言するならば、これらの先行研究は、移民社会ドイツの文脈においてインターセクショナリティを分析視点に据え、差別の構造や権力関係を議論する必要性を提起していると言えるだろう。

そこで、本研究の目的は、インターセクショナリティに着目しつつ、移民社会ドイツにおいてインターセクショナルな議論がいかに展開されてきたのか、移民やレイシズム、ジェンダー・セクシュアリティ等も視野に入れた先行研究を踏まえて整理し、カテゴリーが権力関係といかに結びついているのか明らかにすることを目的とする。その際、移民、レイシズム、ジェンダー・セクシュアリティに関わる研究領域のなかでも、とりわけクィア・スタディーズに着目する。筆者の問題意識の根底には、異文化間教育において差別の構造や権力関係を分析する必要があるが、移民に関わる領域は多々あり、異文化間教育の先行研究だけに注目しては、差別の構造や権力関係を丁寧に分析する上で捨象されてしまうものが生じるのではないかと、という疑問がある。そのため、本研究では直接的に「異文化間教育」を扱わずとも、関連する研究領域の先行研究を射程に入れることで、異文化間教育との接近や重なりを見いだすことも目指す。それにより、インターセクショナリティから異文化間教育を捉え直すという試みが可能になるのではないだろうか。

## 1. クィア・スタディーズの特徴

本研究において着目するクィア・スタディーズについて概観しておこう。

菊地・堀江・飯野（2019）によれば、クィアとは、「性（ジェンダー/セクシュアリティ）にまつわるアイデンティティ・カテゴリーとして、あるいはそれらの緩やかな総体を意味する言葉」（4頁）であり、「特定の性の在り方のみを『ノーマル』と見なし、それ以外を『逸脱』と位置づけ、他者化する考え方を批判的に検討する視点」（同上、5頁）であるという。後者の「視点としてのクィア」は、われわれが無前提的に当然としているものを問う視点として興味深いものである。クィアを視点とすることで、異性愛を所与のものとして構築されている社会制度やそれを構成する要素を明らかにすることができる。

森山（2017）はクィア・スタディーズの視座として3点取り上げている（126-127頁）。第一に、差異に基づく連帯の志向である。これは、クィア・スタディーズが多様なセクシュアルマイノリティについてそれらの差異を隠蔽することなく関連付けて考察することを指す。第二に、否定的な価値付けの積極的な引き受けによる価値転倒である。これは、「クィア」ということばが用いられてきた歴史的背景<sup>1</sup>を考えると理解しやすい。クィア・スタディーズは、「所与の構造の中に劣位に置かれているものが、その位置に置かれるがゆえに構造内の序列を転覆できる（あるいはしてしまう）契機を注意深く探る学問」（森山 2017、127頁）とされる。第三に、アイデンティティの両義性や流動性への着目がある。マイノリティが一致団結し、権利獲得していくために、一貫したアイデンティティを持つべきというようなアイデンティティ・ポリティクスが起ころうるが、アイデンティティは一貫したものであると捉えること、そうしたアイデンティティが強いられることにそもそも疑義を呈する必要がある。

<sup>1</sup> クィア (queer) ということばを辞書で引くと、侮蔑語として説明がなされている。英語圏において、特に男性同性愛者に対して侮蔑的、否定的に用いられたことばであるが、そのことばを自分たちで名乗る、つまり肯定することにより抵抗し、否定的意味を逆転させていったという経緯がある。新ヶ江（2022）を参照。

これら3つの視座から、差異をどのように捉えるか、差異のある人が置かれる構造をいかに捉え、いかに転換することができるのかといった点や、差異のあるマイノリティだからといって一枚岩ではないことなど、異文化間教育において異なる他者を論じるときの視点と共通する部分を見いだすことができる。

上記で取り上げた先行研究は、日本語によるものであるが、ドイツ語による先行研究にも目を向けよう。クィア理論について、Riegel (2017) は「クィア理論は、異性愛のマトリックスの優勢を問うことに焦点化した異性愛規範の批判として理解される」(S. 71) と述べている。さらに、Dietze et al. (2012) はクィア理論とインターセクショナリティについて、「クィア理論とインターセクショナリティの思考パターンに明瞭な類似性があるにも関わらず、その関係性は複雑であり、収斂と拡散を含むものである」(S. 107) という。これらの言及からは、クィア理論やインターセクショナリティを用いることより、われわれの社会にある無前提的な規範を浮上させる必要性を提起していると言える。しかしながら、それと同時に、「収斂と拡散を含む」という点を考えるならば、インターセクショナリティはカテゴリーが幾重にも重なる部分に細かく焦点を合わせていくのではなく、そこに焦点化しつつもそれを押し広げていくことが意味されていると取れる。これは、清水 (2021) が述べているように、視野から外されてきた、周縁化されてきた人々に焦点を当てること、視野から外されてきた人々を含みつつ、視野を広げ、そこに潜む規範を問うことに通ずる。

## 2. インターセクショナリティを分析視点とした際のカテゴリーの問題

インターセクショナリティを視点とする際に必ず問題となるのが、カテゴリーである。カテゴリーの問題については、伝統的なカテゴリーとして「民族/“人種”」「階級」「ジェンダー」(Walgenbach 2012)、伝統的なカテゴリー以外に着目されるものとして「年齢」「セクシュアリティ」「宗教」「移民」「能力」「障害」「社会的出自」など (Bräu & Schlickum (Hrsg.) 2015) が挙げられる。

また、異文化間教育の文脈においては、「外国人の子ども」「途中編入の子ども」「移民背景」(Georgi & Mecheril 2018, Mecheril & Shure 2015) などが挙げられる。これらから、カテゴリーが多様であることが明らかである。人の多様な側面を意識しようとするほど、カテゴリーは無限に増えていくことになる。しかしながら、それはインターセクショナルリティを視点に分析することの本来のねらいとは異なったものとなってしまう。そのため、カテゴリーをいかに選択するか、そしていかに重み付けをするのかという点が重要になるとWalgenbach (2012) は述べている。また、時代の変化に応じてカテゴリーにも変化が生じる。例えば、未だに根強く残る「男／女」というカテゴリーも男女二元論が当然視されていた時代から、現在はこうした二元論に疑義が呈されている。そう考えると、Dietze et al. (2012) が述べるように、時代に合ったカテゴリーを考慮していく必要がある。さらに、この点とも関連するが、カテゴリーは決して不変ではないということも意識する必要もあるだろう。Mohr (2021) はカテゴリーが問題になることについて、カテゴリーをなくせばいいというような単純なことではなく、カテゴリーをずらす、すなわちカテゴリーを作り、括る側とカテゴリーが作られ、括られる側の関係性をずらしていくことについて言及している。

こうしたカテゴリーについて、移民社会において想起されるのは「われわれ」と「かれら」という二項対立のカテゴリーである。これは表裏一体のものである。Mecheril & Shure (2015) は、「国家・民族・文化的にわれわれではない者 (Nicht-Wir) との関係を通して、暗示的に国家・民族・文化的なわれわれの規範や当たり前が生産されるという、ある特別な差異や属性の序列の確認としてかれらに対する学校実践を理解する」(S. 110) と述べる。これは、「かれら」というカテゴリーを作り出すことを通して、それに対置する「われわれ」を生み出し、それを維持する価値・規範や当たり前が作られ、これらが再生産されることで「われわれ」が強化されていくことになる。

Mecheril & Shure が指摘するこの問題性は、他のカテゴリーにも通ずるものである。こうした問題性を意識した上でカテゴリーについて検討する必要がある、それを意識することによってインターセクショナリティを分析視点としてより精緻に用いることができると言えるだろう。

### 3. 先行研究に見る「クィア」と「移民」に関する論点

先述した通り、「かれら」を作り出すことによって「われわれ」が生み出され、それを維持する価値・規範が「われわれ」を強化するが、以下、具体的なカテゴリーに着目した先行研究を整理しておこう。

#### (1) 「クィア」×「移民」×「家族」

Riegel (2017) は、一人親の家族、親がクィアである家族、クィアのバッチワーク・ファミリーなど、家族の多様化が教育学やソーシャルワーク論の関連テキストにおいてほとんど考慮されていないと指摘している。移民研究においても同様で、異性愛規範が該当しない家族（形態）についての関連が見られないという。Riegel は例として『ハンドブック移民と家族：家族とソーシャルワークのための基礎 (*Handbuch Migration und Familie: Grundlagen für die Soziale Arbeit mit Familien*)』(Fischer & Springer (Hrsg.) 2011) を挙げ、こうした実践的な文献においても前提は異性愛であり、男女二元論に基づいていると述べている<sup>2</sup>。そして、「さまざまな権力関係の交差とそれに結びついた

---

<sup>2</sup> このハンドブックは、移民の親の出身国・地域における子育てや性別役割意識、男女の権利など、ドイツで育つ子どもたちの意識や実際とは異なることを背景に、そうした異なりを意識しつつ、どのように人々をドイツ社会に統合するための支援が可能となるかといった観点が強いと言える。とりわけ、ムスリム移民家庭が父権的な場合に、母親や娘の教育・学習機会が阻害される可能性があるため、その点がハンドブック編纂時に強く焦点化されていたと言えるだろう。これらの点を鑑みるならば、この段階では「クィア」の視点を含められる段階でもなかったし、時代としてもまだ性の多様性に関しては優先度が大きく捉えられていなかったと考えることができる。

重なりや複層的な属性、あるいは差別は、支配的な社会学や教育学の家族に関するディスコースにおいてほとんど考慮されていない」（Riegel 2017, S. 78）と問題性を指摘している。つまり、教育学やソーシャルワーク論における家族をめぐる議論において、移民のなかにも当然存在するクィアの生活様式が不可視化されているのである。

そこで、Riegelは「クィア」と「家族」に着目し、「移民と統合」というテーマの下で人種化・文化化されるクィアについて論じている。移民家族の場合、家族の一員がクィアである場合に、特にムスリム移民であった場合にムスリムのなかに見られるホモフォビアに注意が向けられる。同性愛を嫌悪する家族のなかで成長するクィアの存在は、家族の分裂や分離を生み出す原因として捉えられてしまう。しかしながら、LGBTQ+の権利擁護が進む西洋社会においては、移民であろうとムスリムであろうと、LGBTQ+の人々は「啓蒙された現代社会の一員」としてドイツ社会の「われわれ」に受け入れられるのである。その一方で、「移民」として十把一絡げに扱われると、ホモフォビアと「移民」が結びつくなかで「ホモフォビアの人々」とラベリングされ、排除されるという状況に陥ってしまう。イスラームに限らず、他の宗教においてもホモフォビアを内包するものはある。しかしながら、例えばキリスト教徒に見られるホモフォビア以上に、移民であるムスリムに見られるホモフォビアのほうが厳しいまなざしで捉えられてしまうという現実がある。

## (2) 「クィア」×「移民」×「イスラーム」

上述したような状況に置かれるムスリムについて、特にトルコ系移民のクィアをめぐるの先行研究が見られる。その前段階として指摘しておく必要があるのは、「父権的なムスリム男性」と「抑圧されるムスリム女性」という構図を所与のものとし、そうした「抑圧されるムスリム女性」を解放しようとするホワイト・フェミニズムによるディスコースである。Çetin (2016) は、ホワ

イト・フェミニズムによる解放のディスコースにおいても、「抑圧されるムスリム女性」「ゲイであるムスリム」は不可視化されているという。例えば、「ムスリムである」あるいは「ムスリムと特徴付けられる」女性はムスリム男性からの抑圧にさらされていると捉えられ、こうしたフェミニズムによる捉え方のなかでの活動では、一方的にムスリム男性を抑圧者とし、かれらに対するレイシズムを再生産するだけである。また、ムスリム女性に対しても、そうした抑圧に抗うのではなく受動的で非行動的と見なしてしまう。つまり、ムスリム男性は「異性愛」で「父権的」であり、「ムスリム女性」はそうした男性から抑圧され、「ゲイ・ムスリム」もそうした異性愛に基づくコミュニティから迫害され、差別される、というものである (S. 84)。こうしたなかで、「抑圧されるムスリム女性」対「宗教に従順なムスリム女性」、「ゲイ・ムスリム」対「異性愛であるムスリム男性」という対置されるカテゴリーが構築されるのである。

ゲイ・ムスリムをめぐっては、Bilger (2012) や Kosnick (2013) において非常に興味深い演劇が取り上げられている。「彼方へ——ゲイなのか、トルコ人なのか? (Jenseits-Bist du schwul oder bist du Türke?)」と題する演劇である。これは、トルコ出身ゲイ・レズビアン協会 (Verein Gays & Lesbians aus der Türkei, GLADT e.V.) の協力の下、トルコないしはクルド出自の移民背景を持つ男性へのインタビューに基づき構成され、2008 年末に初演を迎えた。舞台は、5 人の男性が「彼方へ」の受け入れホールの待合室におり、女性がアンケートに記入を求めるところから物語が始まる。アンケートの回答欄には二元論に基づく 2 つのチェックボックスしかなく、その 2 つの選択肢の間で決断が迫られるというものである。そして、ここではドイツ人のゲイ、トルコ系移民のゲイ、クルド系移民のゲイが登場し、それぞれが持つステレオタイプが述べられている<sup>3</sup>。

<sup>3</sup> ドイツ人ゲイが抱くトルコ系ゲイに対するステレオタイプには、オリエンタリズムやマッチョといった男性性のイメージが反映されている。クルド人はトルコにおけるマイ



ここで描かれる大きなステレオタイプが「トルコ人ゲイが解放されにやってきた」というものである。これは、ドイツにおけるゲイ・ムーブメントが同性愛である移民に向けるまなざしを表している。トルコ系移民のゲイに向けられるステレオタイプは、Çetin が示しているように、「トルコ系男性（ムスリム男性）が異性愛であり、ホモフォビアである」というものである。そのため、ドイツのゲイ・ムーブメントのなかでも、トルコ系移民のゲイは同胞コミュニティのなかにある異性愛規範やホモフォビアによる差別から解放されるためにドイツにやってきた、と捉えてしまうのである。そこでは、トルコ系移民のゲイ自身がムスリム男性であることは、捨象されているのである。つまり、「ゲイ（クィア）」のカテゴリーは可視化し、「ムスリム男性」というカテゴリーは不可視化しているのである。

Çetin (2016) は、「同性愛者」対「ムスリム」という対立構図が構築された、先の演劇とはまた異なる事例を取り上げている (S. 124-127)。これは、2014年11月にベルリン・リーダーシップ協会がゲイやレズビアンとともにモスクを訪問する企画を行ったことに端を発する。これはリーダーシップ・ベルリンによる寛容と受容のプロジェクト「meet2respect」の枠組みで企画されたものであり、モスク、ゲイ・リーダー人材職業協会、ドイツ・レズビアン・ゲイ協会 (Lesbian- und Schwulinnenverband in Deutschland, LSVD) が協力して企画を進めていた。企画の当初、モスクの側もこうした企画を積極的に受け止めていたが、LSVD がモスクの見学だけではなく、ディスカッションも祈りの場で行いたいと提案した。しかしながら、モスク側は「モスクは祈りの場であり、1日のさまざまな時間帯に信者が来て祈りを捧げるために使われること、そしてそれはこうしたイベントより優先される」として、その提案は断り、別の場

---

ノリティであるが、クルド系のゲイはドイツ社会のなかでトルコ人であることとクルド人が区別されていない現実があることを理由に、ドイツ社会のなかでトルコ系として振る舞っている様子が描かれる (Çetin 2016, S. 125-126)。

所で代替案を提示した。祈りの場であるというモスクの機能を考えれば、こうした理由で断られるのはもっともであろう。しかしながら、LSDV が「モスク側が断った」とメディアに結果のみ伝えたため、その理由については公表されることなく、「モスク側が断った」という結果だけが一人歩きする事態に陥った。これは、「同性愛者」対「(同性愛に非寛容的な) ムスリム」という非常に単純化された構図に陥った事例である。このような単純化された対立構図にたやすく陥る背景には、「ムスリムはホモフォビアである」というステレオタイプがドイツのメディアや社会のなかに強固に存在するからであろう<sup>4</sup>。

その後、meet2respect のディスカッションはモスクではなく、教会で開催されることになり、そこには、モスクの関係者ではなく DITIB のベルリン州支部代表が参加した。そして、当事者となったモスクは声明を発表した。その声明では、メディアで報じられなかった経緯が述べられた。概略は以下の通りである (Çetin 2016, S. 125-126)。

このイベントはそもそも LSDV によるものではなく、リーダーシップ・ベルリンのプロジェクトである meet2respect の枠組みで行われるもので、モスク見学とそれに続いてのディスカッションが予定されていた。しかし、LSDV はこうした出会いとなる機会を任せることを拒み、さらにはモスクで実施することに固執した。その一方で、具体的な計画も予定も立てられていなかった。モスクは meet2respect の枠組みで対話を継続する準備は整っている。ところが、モスクの見解が誤って伝えられ、継続的な協議に同意が得られなかった。モスクの側はなぜこのようなことが生じたのか理解できない。それゆえ、

---

<sup>4</sup> こうした議論は過去にも生じていた。その当ても「同性愛者」対「ムスリム」という対立構図が作られ、「ムスリムに性的指向はないのか」「すべての同性愛者は非ムスリムであると理解されるのか」といった皮肉めいた問いが生じていた。そのため、2008 年にベルリンのモスクの上部団体である DITIB (Diyanet İşleri Türk İslam Birliği, Türkisch-Islamische Union der Anstalt für Religion e.V) がホモフォビアやすべての人に対する差別に抗するムスリム組織とともに意見表明する事態となった (GLADT, 2009)。

LSVD とのさらなる協議からは距離をとり、こうしたコミュニケーションの姿勢についても今後はコメントしない。

モスクは LSVD という組織に対してはこのような姿勢を明瞭に打ち出したが、モスクやイスラームに関心のある同性愛者を排除したわけではなく、関心のある個人とは対話を行うとしている。

このエピソードからは、「同性愛者」対「ムスリム」という非常に単純化された構図が作られやすいことが浮かび上がる。丁寧に分析する必要はもちろんあるものの、このエピソードからは、ドイツ社会における（白人）同性愛者がムスリムに対して抱いているステレオタイプの大きさがうかがえる。しかし、同時に留意すべきは、かれらに向けられるムスリム移民の差別や敵視というものも存在するという点である。互いの対話をどう切り開いていくのか。これには、対話の難しさの背後にある、お互いが被差別の状況に置かれる者同士であるという状況の打破も必要になるだろう。

#### 4. ドイツ社会におけるホモナショナリズム

Çetin (2016) は「クィア」「移民」「イスラーム」の3つのカテゴリーが関係する状況について、その詳細を分析している。その関係性を示したのが、次の図である。

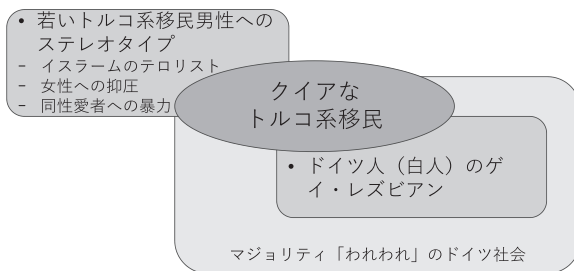


図 クィアなトルコ系移民をめぐる構図  
Çetin (2016) より筆者作成

まずは、「若いトルコ系移民男性へのステレオタイプ」と「ドイツ人（白人）のゲイ・レズビアン」という2つのカテゴリーを見てみよう。まず、この両者の間には、「移民」と「ドイツ人」、マイノリティとマジョリティという構図が所与のものとして存在する。そのなかで、若いトルコ系（ムスリム）移民男性へ向けられるステレオタイプは、安全保障の面から「イスラームのテロリスト」というイメージで括られたり、先ほどから繰り返し述べているように、「父権的」なイメージが強く「女性への抑圧者」と見なされたりする。さらには、同性愛者が日常的にさらされる差別や暴力への不安などから「同性愛者へ暴力」を振るう者として見なされたりもする。この後者のイメージは、ドイツ人の特に白人のゲイやレズビアンが抱くものである。そして、ドイツ人のゲイ・レズビアンは、「ドイツ人」であることでドイツ社会ではマジョリティであり、異性愛規範がありながらも、LGBTQ+の権利擁護に取り組んでいる社会の一員と受け止められている。

このような二項対立の間にまさに置かれるのが「クィアなトルコ系移民」である。先行研究でも示されているとおり、クィアなトルコ系移民は、同性愛が抑圧される自身のコミュニティから「解放される」ためにドイツにやってきた、あるいはLGBTQ+コミュニティにやってきたとドイツ人から評される。これはクィアであることを承認する社会の側が、「クィア性」を歓待し、受容していることを示す。しかしながら、すでに述べたとおり、トルコ系移民であること、ムスリムであることはそこでは捨象されているのである。

こうした捨象の構図を支えるのが「ホモナショナリズム（Homonationalism）」である。ホモナショナリズムとは、西洋においてますます増えるゲイやレズビアンの受容に基づき「市民社会の優越」の一つの表現として、特にムスリム社会に対するものとされる。Çetin (2016) は、ドイツにおけるホモナショナリズムをホモフォビアの新たな定義とし、「同性愛嫌悪は移民に特化した現象で、それは西洋社会に根付く主に白人のレズビアンやゲイに向けられ

る」(Çetin 2016, S.106) としている。こうした考え方が根底にあるからこそ、先に述べたような、ゲイ・ムスリムを「解放されたいゲイ」として「われわれ」に歓迎し、「ムスリム」であるということを捨象しているのである。

このようなホモナショナリズムに支えられた「同性愛」対「ムスリム」の構図を攪乱する動きも見られる。例えば、トルコ系移民女性弁護士である Seyran Ateş が 2017 年に設立したモスクは、リベラル・イスラームのモスクで、祈りの場を男女で分けず、共に祈る場としたり、LGBTQ+ のムスリムに祈りの場を提供したりしている (ZDF Forum am Freitag 26. 03. 2021)。また、アフガニスタン出身のクィアは、出身国におけるクィアに対するまなざしについて、トランス女性やクィアの立場から発信している (ZDF Forum am Freitag 08. 04. 2022)。さらに、ベルリン生まれ・育ちでありながら、家族の価値観やコミュニティが向ける嫌悪に葛藤するゲイ・ムスリム、出身国レバノンから逃れ、庇護権請求者として生きるゲイ・ムスリム、イマームとしての訓練を受け、LGBTQ+ 向けのスペースを作ろうとするトランス男性など、クィアであり、多様な背景を持つムスリムの姿が発信されるようになってきている (NDR 18. 05. 2023)。このように多様な姿が発信されることによって、強固に作られているように思われる「同性愛」対「ムスリム」の構図が揺さぶられ、新たな関係性を構築する糸口が見いだされるだろう。

## おわりに

### —異文化間教育論との接続とインターセクショナルリティという視点の可能性—

以上、「クィア」に着目し、移民社会ドイツにおける「移民」をめぐるインターセクショナルな議論を取り上げ、整理を行ってきた。これまで見てきたように、移民社会ドイツにおいて多くの移民のルーツである「トルコ」と受け入れ社会である「ドイツ」が対置されている点が浮き彫りになった。それは、トルコを前近代的で、父権的家父長制であり、異性愛規範が強いムスリムの国で

あると見なし、その一方でドイツを現代的で、男女平等が重視され、性の多様性を受容する国であると見なしている。このような見方は、Diehm & Radtke (1999) が1980年代の教育学やソーシャルワークに関する先行研究を検討するなかで指摘したステレオタイプが未だに存在することを示している。また、ゲイ・ムスリムの「ゲイ」というカテゴリーが受容される際に「トルコ人」「ムスリム」というカテゴリーが不可視化されるという状況は、「性の多様性を受容し、LGBTQ+の権利擁護を進める、先進的なドイツ」といったドイツ社会の自己イメージやあり方に規定されるものである。こうした受け入れ社会が当然とする価値・規範が問われず他者が構築されている状況については、異文化間教育においても議論がなされるべき課題である。Mecheril & Shure (2015) が指摘したように、「かれら」という対置したカテゴリーを生み出すことで、「われわれ」を維持・強化している。この維持・強化につながっている価値・規範に異文化間教育は自覚的になる必要があるだろう。

クィア・スタディーズも同様に価値・規範を問うものである。そのため、本稿では「クィア」というカテゴリーが「移民」をめぐる議論のなかでどのように取り上げられているのか議論を整理した。それにより、移民社会ドイツにおいて自らとは異なるカテゴリーを生み出す価値・規範がより明瞭になり、それを意識的に視野に取り込みながら議論を進めることが可能となる。インターセクショナリティという視点は、一つのカテゴリーのみに焦点化した結果、捨象されたそれ以外のカテゴリーをも拾い上げていくことができる。インターセクショナリティを分析視点とした際のこうした特質は、無前提的な価値・規範に自覚的になり、権力関係を問うことを可能にするため、異文化間教育において有効活用されなくてはならない分析視点になりうる。さらに、そうした分析視点によって明らかになった権力関係から既存の関係性を問い直し、人々をどのように包摂していくのか検討する契機を生み出すであろう。異文化間教育とクィア・スタディーズは不問とされるマジョリティの価値・規範を問い、権力

関係を分析し、関係性を変えていくことを目指すという点に共通点があると言える。この点に、異文化間教育とクィア・スタディーズの接続可能性、そしてインターセクショナルリティという視点の可能性を見いだすことができるだろう。

最後に、本稿の残された課題について述べておく。移民社会ドイツにおいて「同性愛」と「ムスリム」という対置を攪乱させる可能性について指摘したが、これには留意が必要である。というのも、ホモフォビアを移民の側の問題として捉えるホモナショナリズムの論理が、マイノリティに対し男女平等やLGBTQ+の受容というドイツ社会と価値・規範を共有する側面だけを受容し、図で示した「クィアなトルコ系移民」と同様に、「われわれ」に取り込める側面だけに焦点化する危険性がある。こうした状況に陥ることは、ホモナショナリズムを強化することにもつながりかねない。

こうした構図を揺るがすために、教育は何ができるのであろうか。移民社会ドイツにおいて、学校教育や学校外の青少年教育はこれまでと同様の価値・規範の下で教育を進めるのは現実を反映しない。では、どのように教育現場で取り組みうるのか。移民社会ドイツにおいて、ジェンダー役割や異性愛規範を問うような異文化間教育の具体的実践とそれを可能とする教員養成や研修について論ずる必要があるだろう。これらの点は今後の研究課題とし、移民社会ドイツにおいて、教育がどのような価値・規範に基づき進められているのか、あるいは移民社会における新たな価値・規範を生み出しているのか、検討したい。

## <付記>

本研究は科研費 22K02341 の助成を受けて実施した研究成果の一部である。

## <参考文献>

伊藤亜希子（2021）「ドイツの異文化間教育学における差異を巡る議論—インターセクショナルリティに着目して—」『福岡大学人文論叢』第 53 巻第 3 号、625-646 頁。

- 菊地夏野・堀江有里・飯野由里子 (2019) 「クィア・スタディーズとは何か」 菊地夏野・堀江有里・飯野由里子編著『クィア・スタディーズをひらく1 アイデンティティ、コミュニティ、スペース』 晃洋書房、1-14 頁。
- 清水晶子 (2021) 「『同じ女性』ではないことの希望—フェミニズムとインターセクショナルリティー」 岩渕功一編著『多様性との対話—ダイバーシティ推進が見えなくするもの—』 青弓社、145-164 頁。
- 新ヶ江章友 (2022) 『クィア・アクティビズム—はじめて学ぶクィア・スタディーズ>のために—』 花伝社
- 森山至貴 (2017) 『LGBTを読み解く—クィア・スタディーズ入門』 筑摩書房
- Bilger, W. (2012): *Der postethnische Homosexelle. Zur Identität >>schwuler Deutschtürken<<*. Bielefeld: transcript.
- Bräu, K. (2015): Soziale Konstruktionen in Schule und Unterricht- eine Einführung. In: Bräu, K. & Schilickum, C. (Hrsg.): *Soziale Konstruktionen in Schule und Unterricht. Zu den Kategorien Leistung, Migration, Geschlecht, Behinderung, Soziale Herkunft und deren Interdependenzen*. Opladen: Verlag Barbara Budrich. S. 17-32.
- Bräu, K. & Schilickum, C. (Hrsg.) (2015): *Soziale Konstruktionen in Schule und Unterricht. Zu den Kategorien Leistung, Migration, Geschlecht, Behinderung, Soziale Herkunft und deren Interdependenzen*. Opladen: Verlag Barbara Budrich.
- Çetin, Z. (2016): Homo- und queerpolitische Dynamiken und Gentrifizierungsprozesse in Brelin. In: Çetin, Z. & Voß, H.-J. (2016): *Schwule Sichtbarkeit-schwule Identität. Kritische Perspektiven*. Gießen: Psychosozial-Verlag. S. 83-127.
- Crenshaw, K. (1989), "Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine, Feminist Theory and Antiracist Politics", *University of Chicago Legal Forum*, 1989 (1), pp. 139-167.
- Diehm, I. & Radtke, F.-O. (1999): *Erziehung und Migration: Eine Einführung*. Stuttgart/Berlin/Köln: Kohlhammer.
- Dietze, G., Yekani, E.-H. & Michaelis, B. (2012): „Checks and Balances.“ Zum Verhältnis von Intersektionalität und Queer Theory. In: Walgenbach, K., Dietze, G., Hornscheidt, L. & Palm, K. : *Gender als interdependente Kategorie. Neue*



- Perspektiven auf Intersektionalität, Diversität und Heterogenität*. 2., durchgesehene Auflage. Opladen: Verlag Barbara Budrich. S. 107-190.
- Georgi, V.-B. & Mecheril, P. (2018): (De) Kategorisierung im Licht der Geschichte und Gegenwart migrationsgesellschaftlicher Bildungsverhältnisse oder: Widerspruch als Grundfigur des Pädagogischen. In: Musenberg, O., Riegert, J. & Sansour, T. (Hrsg.): *Dekategorisierung in der Pädagogik. Notwendig und riskant?* Bad Heilbrunn: Verlag Julius Klinkhardt. S. 58-70.
- GLADT (2009): Religion und Homosexualität im Kontext von Rassismus. Zu den Erklärungen muslimischer Organisationen zur Homosexualität und ihrer Einsetzbarkeit im Kampf gegen Homophobie aus emanzipatorischer Perspektive.
- Ketelhut, K. (2013): Diversity als Ordnungsstrategie. Anmerkungen aus der Perspektive der Queer-Theory. In: Kleinau, E. & Rendtorff, B. (Hrsg.): *Differenz, Diversität und Heterogenität in erziehungswissenschaftlichen Diskursen*. Opladen: Verlag Barbara Budrich. S. 63-77
- Kosnick, K. (2013): Sexualität und Migrationsforschung: Das Unsichtbare, das Oxy-moronische und heteronormatives „Othering“. In: Lutz, H., Vivar, M.-T.-H. & Supik, L. (Hrsg.): *Fokus Intersektionalität. Bewegungen und Verortungen eines vielshichtigen Konzeptes*. 2., überarbeitete Auflage. Wiesbaden: Springer VS. S. 159-179.
- Mecheril, P. & Shure, S. (2015): Natio-ethnokulturelle Zugehörigkeitsordnungen- über die Unterscheidungspraxis „Seiteneinsteiger“. In: Bräu, K. & Schilickum, C. (Hrsg.): *Soziale Konstruktionen in Schule und Unterricht. Zu den Kategorien Leistung, Migration, Geschlecht, Behinderung, Soziale Herkunft und deren Interdependenzen*. Opladen: Verlag Barbara Budrich. S. 109-121.
- Mohr, L. (2021): Queere Intersektionalität? Kritik und Transformation gesellschaftlich-kapitalistischer Verhältnisse. In: Mauer, H. & Leinius, J. (Hrsg.): *Intersektionalität und Postkolonialität. Kritische feministische Perspektiven auf Politik und Macht*. Opladen: Verlag Barbara Budrich. S. 67-89.
- NRD Kultur: Queer und muslimisch. (18.05.2023)
- Riegel, C. (2017): Queere Familien in pädagogischen Kontexten- zwischen Ignoranz

- und Othering. In: Hartmann, J., Messerschmidt, A. & Thon, C. (Hrsg.): *Queertheoretische Perspektiven auf Bildung. Pädagogische Kritik der Heteronormativität*. Opladen: Verlag Barbara Budrich, S. 69-94.
- Sinanoglu, C. & Polat, S. (2023): Rassismusforschung in Bewegung: Rassismus- ein neues altes Thema? In: Nationaler Diskriminierungs- und Rassismusmonitor (Hr.): *Rassismusforschung I: Theoretische und interdisziplinäre Perspektiven*. Bielefeld: transcript. S. 7-22.
- Traubneck, M. (2023): Intersektionalität: Begriffliche Annäherungen an eine vielschichtige Debatte. In: Nationaler Diskriminierungs- und Rassismusmonitor (Hr.): *Rassismusforschung I: Theoretische und interdisziplinäre Perspektiven*. Bielefeld: transcript. S. 101-128.
- Tuider, E. (2013): Geschlecht und/oder Diversität? Das Paradox der Intersektionalitätsdebatten. In: Kleinau, E. & Rendtorff, B. (Hrsg.): *Differenz, Diversität und Heterogenität in erziehungswissenschaftlichen Diskursen*. Opladen: Verlag Barbara Budrich. S. 79-102.
- Walgenbach, K. (2012): Intersektionalität – eine Einführung. URL: <http://portal-intersektionalitaet.de/theoriebildung/ueberblickstexte/walgenbach-einfuehrung/> (Letzter Zugriff: 2021. 06. 12)
- ZDF Forum am Freitag: Muslimische und Queer Anlaufstelle für Islam und Diversität in Berlin. (26. 03. 2021)
- ZDF Forum am Freitag: Queer mit afghanischen Wurzeln. (08. 04. 2022)